家庭向洗濯と汚点ぬきの仕方

593
D
7

593.5
089

家庭向洗濯と汚點ぬきの仕方

はしがき

一般家庭に於て洗濯は、料理に次いで、最も日常生活に卽した仕事であり乍ら、却つて其研究は顧みられて居ません。只習慣的に從來の方法を極く狹い範圍に於て、繰り返へされて居るだけで、少し手馴れない品は、洗濯屋や其道の專門家の手に委ねる風でありますが、之が家庭に於て主婦自らの手で、出來るとしたならば、如何に便利であり、時間や經濟の上に餘裕を生じて來るかは申す迄もありません。依つて著者は以前から之が一般家庭に普及する事に對し、聊微力を捧げて居りましたが、今回漸にしてこれを小冊子として、公にする事を得ましたことを喜んで居ります。幸にして皆樣の日常洗濯の上に、役立つ事を得れば滿足に存じます。

東京都千代田區
昭和
3550
女子學院図書館

兎角私共は新奇を好み、外觀や流行に捉れ易くて、舊きを整理し、保存して、新しきを保つ事を等閑にして居ます。尙一面に於て日本の婦人には科學的知識が足りない爲、其應用力が狹く爲に時間の經濟の上に其他家庭生活に影響してゐる點が多々あると思ひます。此の書に紹介された洗濯法は、科學の應用に基き、特別の施設や用具を必要とせず、何人にも容易に理解し、實習の出來る樣な方法を用ひた物であります。此種の著述は既に世に公にされた物が幾程かありますが、或物は專門的であつたり、或物は職業向の物であつたり、或は學校に於いて教授するために使用される向の物が多く、兎角主婦として一通り心得て置く程度の物としては不幸にも好適の物を見出す事が出來ませんでした。折角著者の意を諒し、幸にして此の小冊子が、只文字の上の理解に止らず一度よりも二度、二度よ

りも三度と經驗を重ねられて興味を增し更に研究を加へられん事を切望致します。

之が一面に於て主婦としての業務の上に、尊嚴を加ふる所以である事を信じ意を强うして世に紹介する次第であります。

尙本書を上梓するに當りまして山崎敏一氏、並に藤田清子氏の盡力を得ましたことに對し謝意を表します。

著者識

最新 家庭向洗濯と汚點拔の仕方

目次

第一節 洗濯用藥品……一
一、洗濯に際して……一
二、家庭に備ふべき洗濯用藥品……一
三、乾燥洗濯用藥品の用途……四
四、濕潤洗濯藥品の性質と用法……五
五、汚點拔用藥品の作用及用法……八
六、色留用藥品の用途及用法……一二
七、漂白用藥品の作用及び用法……一六
八、石鹸の種別……一八
九、石鹸の鑑別法……二五
一〇、洗濯水に就いて……二五

第二節　洗濯の準備及心得……二七
一、踏み洗濯より立即洗濯……二七
二、改良洗濯盥……二八
三、干網を用ひよ……三〇
四、石鹸の使ひ方……三一
五、有効なる洗濯法としての蒸洗……三二
六、白木綿類の蒸洗……三三
第三節　糊付けに就て……三五
一、木綿の糊付けの仕方……三五
二、絹物類の糊付の仕方……三七
三、出來榮のする伸子張……三八
四、光澤を保つ絹織物の仕上……四〇
第四節　色留法……四三
一、木綿物の色留……四三
二、絹地の廉物の色留……四三
三、絹地高價なものゝ色留……四四

四、毛織物の廉物の色留……四四
五、毛織物の高價な物……四四
六、染料の種類によつて其色留めに用ひる藥品……四四
七、紺黑サージの洋服の色留……四五
八、紺　紺……四六
九、硫化染料に依る各繊維の色留法……四六
第五節　各種和洗濯……四七
一、木綿及び瓦斯の洗濯法……四八
二、木綿、縮、明石の縮まぬ洗ひ方……四八
三、人造絹糸の洗濯……四九
四、富士絹の洗濯……五〇
五、白地絹毛類の洗濯……五〇
六、銘仙、糸織、高貴織、八端等の洗濯……五一
七、大島、米流、結城の洗濯……五三
八、大島、米流の衿の拭き方……五四
九、白羽二重、白リンズの洗濯……五五
一〇、琥珀、博多の洗濯……五五

一一、繻子の洗濯……五七
一二、支那緞子、珠珍の洗濯……五八
一三、紅絹の洗濯……五九
一四、縮緬、金鈔の友禪物の洗濯……六〇
一五、明石、オ召の洗濯……六〇
一六、鹽瀬、羽二重の洗濯……六一
一七、甲斐絹の色刷洗濯……六一
一八、天鵞絨、綸天、唐天、コール天の洗濯……六二
一九、モスリン縮まぬ洗ひ方……六三
二〇、毛糸スエーターの伸びぬ洗ひ方……六四
二一、毛メリヤスの縮まぬ洗ひ方……六五
二二、毛皮類の洗ひ方……六六
二三、毛織物の仕上げ方……六七

第六節　各種洋洗濯……六八

一、米國式クリーニング……六八
二、佛國式クリーニング……七〇
三、英國式クリーニング……七〇

四、廻洋服……七一
五、カラー……七二
六、ホワイトシヤツ……七四
七、普通シヤツ類……七五

第七節　附屬品其他……七六

一、鳥打帽子洗ひ方……七六
二、羅紗帽子の洗ひ方……七七
三、半襟、手柄の洗ひ方……七七
四、ネクタイの洗ひ方……七八
五、白足袋の洗ひ方……七九
六、足袋の洗ひ方……八〇
七、木綿の黑靴下の洗ひ方……八〇
附記　靴下の保存……八一
八、白レースの洗ひ方……八二
九、眞綿のチヨツキ洗ひ方……八二
一〇、紋帳の丸洗……八四
一一、洋傘……八五

一二、糊抜き法……八八
一三、湯通し……八九
一四、目引き……八九
一五、艶出油ノ製法……九一
イ、銘仙、瓦斯、糸織……九一
ロ、大島、米流、結城……九一
一六、疊表の洗ひ方……九一
一七、障子の引手……九三
第八節　各種汚點拔……九三
一、インキノ種類
（イ）コツピー屬インキ……九四
（ロ）アリザリン屬インキ拔……九五
（ハ）鹽基性インキ……九五
（ニ）永久不變色インキ……九五
二、インキ類のしみぬき
（イ）コツピー屬インキ……九六
（ロ）アリザリン屬インキ……九六

（ハ）鹽基性インキ……九六
（ニ）永久不變色インキ……九七
三、汗、尿……九八
四、草類、油ヒッチ……九八
五、果汁……九九
六、墨……九九
（イ）墨汁……一〇〇
（ロ）硯の墨……一〇〇
（ハ）墨寫眞の墨……一〇一
七、人血……一〇一
八、鞣油……一〇一
九、茶、コーヒー……一〇一
一〇、ペンキコールタール……一〇二
一一、油類……一〇二
一二、香油……一〇二
一三、亞麻仁油……一〇二
一四、印肉、朱肉……一〇三

一五、瀬戸物又は金物の便器……一〇三
一六、亜鉛の便器のサビ……一〇三
一七、土……一〇四
一八、粘土……一〇四
一九、膏薬……一〇四
二〇、煤煙……一〇五
二一、靴墨……一〇五
二二、雨……一〇五
二三、ワニス……一〇五
二四、小虫の蹟や小個……一〇五
二五、スープ……一〇六
二六、脂蘇……一〇六
二七、バター……一〇六
二八、ニス……一〇六
二九、ヤニ……一〇七
三〇、黴……一〇七
三一、乳汁……一〇八

三二、蠟……一〇八
三三、錆……一〇九
三四、不明汚點鑑別法……一〇九

第九節　衣類保存法……一一〇

一、アイロン燒焦しの直し方……一一〇
二、アイロンの温度に就いて……一一一
三、日光燒の直し方……一一二
四、日光燒を防ぐ法……一一三
五、布が擦れて光を生じた時……一一四
六、雨に濡れた洗濯物の處置……一一四
　附記　雨に依つてしぼの出來た時……一一四
七、毛織物の害虫に就いて……一一六
八、洋服の手入法……一一九
九、衣服保存上心掛……一二一
一〇、子供洋服洗濯上の心得……一二四

最新家庭向洗濯と汚點ぬきの仕方

大妻コタカ著

第一節　洗濯用藥品

一　洗濯に際して

洗濯をするには品物を區別し、手順を考へ、洗濯に用ひる器具や藥品を整へるなど、順序よくしませんと、原料や勞力や時間が、不經濟になり易うございます。

一、洗濯物の區別

先づ白い物と色のあるものとに別け、更に絹と毛の様な動物性の物と木綿や麻の様な植物性の物とに區別して置きます。誤つて白地に色が泌み付く事があつたり、色物と白い物とを一緒にして熱洗ひをしたために、色物が褪色するのこともあります、又木綿と絹を一緒に洗つた爲に、絹がアルカリに依つて地質を損じたり、毛と木綿とを一緒にして洗つた爲に、毛織物が縮んだりする虞があります。尙注意すべき事は其着物を縫つてある糸でありますっ糸によつては其色が泌みて布に附き見苦しくなることなどもありますから、洗ふ時はこれ等のことを細かく調べる必要があります。

二、順序

先づ洗濯物は白くて汚れの少い物から始めます。そして次第に汚れの多い物を、其液で洗ひます。然し石鹸は泡が立たなくなつたら效がありませ

んから、新に液を取り替へねばなりません。ひどく汚した物や油浸みた物は石鹸液の中へ、洗濯曹達の溶液を少し入れると落ち易くなります。

三、洗濯用材

洗濯に取りかゝつてから、あれが無い、之が足りない等と言つて居ては間に合ひませんから、必要な物は整へて置きます。

二、家庭に備ふべき洗濯薬品

一、洗濯石鹸　二、粉石鹸　三、マルセル石鹸

四、洗濯曹達の濃溶液（ビールの空瓶に溶いて置きます）

五、糊　木綿麻の物は生麩糊が徳用であります。夏の頃は御飯糊が便利ですが、それ等に限らず澱粉質の物を準備して置きます。

六、絹や毛の物には布海苔、ゼラチン、デキストリン等を用ひます。

七、漂白　木綿物ならば、カルキ、ホワイトローズ、絹物ならば白性等必要に應じて整べて置きます。

八、青味付、白地に青味付として、金ピロを藥瓶に溶いて置き入用に際して、一、二滴づゝ垂らして用ひますと便利です。

其他

一、揮發油　二、アルコール　三、ベンジン　四、炭酸マグネシユーム　五、醋酸　六、アンモニア水　七、テレビン油　八、酒石酸　九、蓚酸　一〇、タンニン酸　一一、ハイドロサルハイド　一二、酸性亞硫酸曹達等の藥品があれば、大抵の場合家庭洗濯としては間に合ひます。

三、乾燥洗濯用藥品の用途

洋服類其他衣類の一部の汚れや油浸みた時、又は襟垢の附いた時には、揮

發油、ベンヂン、エーテル、アルコール等の藥品を選び、乾燥洗濯法に依つて綺麗に致します。其中洋服類には揮發油、ベンヂン油を用ひ、大島、米澤織（米流）、結城等に襟垢の附いた時は、エーテル、又はクロ、ホルムを用ひ、人造絹糸、白地麻、木綿の襟垢はアルコールを用ひます。附水布、レインコート等が油浸みた時はエーテルを用ひ、銘仙類の襟垢にはベンジンを使用致します。

其他の方法は各々洗濯法に詳しく述べてあります。

四、濕潤洗濯用藥品の性質と用法

普通湯水を以つて、洗濯する方法を濕潤洗濯と申しまして、其れに用ひる藥品と其の性質と用法を左に記します。

一、普通洗濯石鹸

植物性繊維卽ち木綿、麻地類に用ひるのは普通に洗濯石鹸と云つてゐるものでありまして、それには固形をなすものや捧狀のものや粉になつたものの等ありますが、何れも强いアルカリ性で此のアルカリ性が脂肪質の垢を溶かし、又其の粘液が、皮膚や衣服等に付いた塵垢を運び去る役目を持つてゐます。同時に物を漂白する性質があります。

二、マルセル石鹸

動物性繊維卽ちモスリン、セル、毛織物、絹布類等の洗濯に用ひるものはマルセル石鹸であります。この洗鹸は極めて弱いアルカリ性で繊維を軟げ垢を去る作用を致します。

三、苛性曹達

苛性曹達はアルカリ性が强いので、普通石鹸で落ち難い樣なひどく汚れ

たものゝ、殊に、脂肪垢を落すに用ひられますが、地質を弱め易くて、絹毛類は勿論、木綿でも、色物には使用しない方が宜敷うございます。

四、炭酸曹達

炭酸曹達はアルカリ性が割合に强い爲、(苛性曹達よりは弱い)油垢卽ち脂肪質の垢を溶解します。それに褪色の憂がありませんから、木綿物、色物等に使用すると便利であります。

五、炭酸マグネシューム

炭酸マグネシュームは石灰質でありまして、遊離アルカリを弱め一方には曹達と化合してオレイント瓦斯を發生します。此の瓦斯は其の布の色を保ちながら、脂肪垢を溶解し、汚れを脱する力がありますから、銘仙類の洗張りに最も適して居ります。然し漂白する性質がありませんから、白地

に對しての效力はありません。

六、醋酸

醋酸はアルカリ分を除き、絹布類の艶を出し、酸性染料で染めた絹布類の色留を致します。用法は普通水三升に醋酸四五滴を入れた溶液を作り其の中に浸します。

食酢を代用する時は其の五倍位を入れます。要するに嘗めて見て少し酢氣がある位の程度の溶液にして用ひます。

七、ゼラチン

ゼラチンは銘仙類の糊付に適用されます。絹布の光澤を出し又鹽分を含んで居ませんから、糊付をしてから保存して置いても汚點になりません。

五、汚點拔用藥品の作用及び用法

布類又は衣類に汚點の出來た時其れを拔き去るに用ひる藥品と其の作用や用法に就いて次に記します。

一、揮發油

揮發油は脂肪、香油、重油等を蒸發させる機能があります。

用法は、汚した部分を揮發油の中に浸して空氣に觸れぬ樣に揉みます又眞綿か、脱脂綿かに含めて、汚みの處を拭ふのであります。

二、アルコール

脂肪や、アルカリ性の爲に出來た汚點を拔くには、アルコールを水六倍位に薄めて用ひます。然し塗料のニス類を溶解する時は其儘使用致します。又人造絹糸を强くし、澤を出す機能があります。それにはアルコールを水二十倍に薄めて用ひます。

三、テレビン油

空氣中に酸化して固着する乾油（例へばペンキ、コールタール、荏油、桐油、亞麻仁油等）の塗料を溶解する性質があります。これを用ひた後は揮發油を付けます。それはテレビン油の油氣を蒸發させる爲であります。

四、アンモニア水

アンモニア水は脂肪酸、卽ち汗の汚點を去りアルカリ性のものを溶解し酸性染料の色拔や、アリザリン屬インキの汚點拔に用ひ、又動物性纖維を軟質に致します。用法は、アンモニア水、三四滴を水一合位の割合に薄め汚點拔きには其儘使用致します。

五、酒石酸

酒石酸は空氣中の窒素を吸收して、無限の漂白劑となり、製練しない植

物性纖維を漂白するに使用します。（例へば板とか疊表など）其他コッピー屬のインキの色を拔くのにも用ひます。

用法は少量を水に溶して用ひ、出來る丈け空氣に觸れさせ乍ら乾します

六、蓚酸

蓚酸は動物性纖維の一種、卽ち白羽二重、白リンズの漂白又は汗燒を直し、鐵錆を取り、直接染料の色拔をし、麥藁帽子、疊表、下駄表等の植物性のものを、漂白するに用ひます。又茶や、コーヒー等に含まれてゐるタンニン酸の汚點を拔きます。用法は少量を熱湯に溶かし、薄めて用ひます。

七、大根汁

動物性鹽分、脂肪化合物、（例へば血液の樣な物）鹽分を含む煮汁、其他

脂肪、アルカリを含んだ物を溶解します。用法は其汁を附けて後、水洗をすればよろしいのです。

八、醋酸

醋酸はアルカリと中和し、汗焼や、日焼を直します。用法は水一合に四五滴位の割合に溶かして用ひます。

九、蛋白質

蛋白質とは卵の白味、牛乳、豆腐汁、米の磨汁、糠の様なものでありまして、プラトンインキの様な、アリザニン屬のインキ、又は鹽基性の赤インキや、中性化合物の汚點拔に用ひます。用法は汚點にこれ等を付けた後、水洗、又は石鹼洗を致します。(但し糠は熱湯に溶かし其の濃液を用ふ。)

六、色留用藥品の用途及び用法

一、燒明礬

直接染料を用ひた木綿、麻類(植物性纖維)の色留に用ひます。用法は、水、三四升に燒明礬を茶匙に一杯位を溶して、布を其中に浸して後、水濯ぎして乾します。

二、醋酸

酸性染料で染めた絹布、又はモスリン等の動物性纖維の色留に用ひます。用法は水、三四升に、醋酸、五六滴を入れ、布を其中に浸し其の儘乾します。水濯ぎは致しません。

三、タンニン酸

鹽基性染料で染めた絹布、又はモスリン等の動物性纖維で色の鮮かな物の色留に用ひます。用法は水、三四升に、タンニン酸、茶匙に二杯位を熱

湯に溶して、其れに燒明礬、茶匙に一杯を加へ、布を其中に浸し、後水濯ぎして乾します。（還元染には色留の必要はありません。）

四、硫酸鐵

アリザニン染料で染めた黒、紺サージの洋服の色留に用ひます。用法は水、五六升の中に、硫酸鐵五匁位を、少量の湯に溶したものに、醋酸を入れ、其中に洋服（一着）を三十分以上、一時間位浸して置き、絞らずに日光に乾します。

五、タカヂアスターゼ

硫化染料で染めた黒紺サージの洋服類の色留に用ひます。用法は、四五升の水にタカヂアスターゼ二匁（茶匙に山盛一杯）を入れ、其中に右洋服を十分間位浸して置き、絞らずに乾します。

六、苦鹽

硫化染料で染めた黒、紺サージの洋服の色留に用ひます。用法は、四、五升の水にクンニン酸と苦鹽を各々茶匙に二杯づゝ入れた液中に、洋服を浸し置き、十分間位の後、そのまゝ取上げて乾します。

七、硫酸銅

アリザリン染料を用ひた紺紺等の色留に用ひます、用法は醋酸、四五滴と硫酸銅（一錢銅貨位）を湯で溶かして、四升位の水に薄めて、其中に布を十分間位浸して置き、後絞らずにそのまゝ乾します。

八、食鹽及び重曹

直接染料で染めた木綿物等の色留に用ひます。用法は三、四升の水に食鹽及び重曹を各々茶匙一杯を入れた液中に、十分間位浸して、水濯ぎして

絞つて乾します。

九、人造硫黄

硫化染料に依る各纖維の色留に用ひます。用法は水三升に人造硫黄五匁位を入れて、其液に布を浸して、その儘直ちに取上げて乾します。

七、漂白用藥品の作用及び用法

一、クロール石灰（一名カルキ）

植物性纖維、卽ち、木綿、麻、リンネル等を漂白しインキや煮汁の汚點拔きに用ひます。（但し白木綿類）

用法は水一升にカルキ茶匙に、二杯を、布袋に入れて漉して、それに重曹茶匙半分を湯で溶かしたものを加へ、其中に布を入れ、布が液の上に出ないやうに凡そ二、三十分間浸して晒し、後、水濯ぎして醋酸處理（水三

升に醋酸五、六滴の溶液に浸すこと）を致します。

二、酸性亞硫酸曹達

動物性纖維や精練してない植物性纖維の、漂白に用ひます。用法は水二升位に亞硫酸盃一杯を入れ、其の液に布を、三四十分間晒します。植物性の場合は水五合に亞硫酸盃一杯半位にして晒し後、水洗を致します

三、ハイドロサルパイド

動物性を還元漂白致します。就中白セル、白モスリンの漂白に適して居ります。用法は湯を二升に、ハイドロサルハイド茶匙に、二杯を入れ、其れに亞鉛末盃一杯を入れ、次に醋酸を、四五滴入れ、其中に布を浸して置きます。凡そ三、四十分間浸して後、水濯ぎを致します。

四、蓚酸

汚點拔用藥品の部で說明した樣に精練してない植物性纖維、動物性纖維の漂白に用ひます。用法は蔘酸茶匙に二杯を熱湯に溶かして、水一升五合位に薄め、其中に三四十分間浸して置きます。次に醋酸、二三滴を水二升位に入れ其中に、浸して水濯ぎを致します。

八、石鹼の種別

石鹼は苛性曹達、炭酸ソーダ、硅酸曹達、過酸化曹達等のアルカリ性の藥品と、椰子油、椿油、オレフエ、胡麻油、牛脂、豚脂等の脂肪質の藥品とを主成分として、それに、リスリン、ワセリン、食鹽を加へて（惡質のものは粘土や磨砂等を加へ）製した物であります。一般洗濯に用ひられて居るもの卽ち洗濯石鹼と言つてゞるものは、苛性曹達に牛脂或は豚脂を混じ、少量の食鹽を加へて製したものでありまして、遊離アルカリが多い

ので、汚れを落す機能が强く、木綿類や麻の白地を洗ふに適當であります けれども、色のある物又は毛や絹には不適當で品物の地質を害し、色を剝し、皮膚を荒します。依つて絹、毛、皮膚に用ひる石鹼はアルカリ性の弱い優良な油で製したものを使用致します。

◎左に石鹼の種類と製法を略記致します。

イ、防毛石鹼
ロ、樹脂石鹼
ハ、純軟石鹼
ニ、マルセル石鹼
ホ、ラックス石鹼
ヘ、牛脂石鹼

ト、豚脂石鹸

以上七種に大別することが出來ます。何れも其製法は左の藥品を、其順序に從つて混合して煮詰め、ドロ〳〵の物となつた時型に流して固めるのであります。

イ、防毛石鹸

此の石鹸は毛絨物、洋服、モス類の洗濯用としても適して居りますが割に高價でございますから、一般に用ひて居りませんが左の分量で右の方法に依り家庭で製する時は便宜と思ひます。

用劑

一、硅酸曹達　二匁

二、椰子油　二匁

三、グリスリン　三匁

ロ、樹脂石鹸

絹布の色物などを洗ふに最も適してゐます。この石鹸で洗つたら、其儘水濯ぎして乾して差支へありません。

用劑

一、青酸加里　三匁

二、椿油（オレフ油、胡麻油等の植物性を用ゆ）一勺

三、白色ワセリン　茶匙二杯

四、過酸化曹達　二匁

ハ、純軟石鹸

普通化粧用に適し、洋傘の洗濯などに好適であります。

用劑

一、酒精　三匁

二、リスリン　三匁

三、硅酸曹達　二匁

四、椿油　二匁

ニ、マルセル石鹸

毛、絹類等の動物性纖維の洗濯に適します。アルカリ性が弱いため、地質を損じません。

用劑

一、牛脂　四匁

二、リスリン　二匁

三、苛性曹達　四匁

四、食鹽　四匁

ホ、ラックス石鹸

油氣を落すに適し、髪を洗ひ、人體の脂肪を落します。

用劑

一、牛脂　三匁

二、豚脂　二匁

三、苛性曹達　三匁

四、硅曾土　二匁

五、食鹽　二匁

ヘ、牛脂石鹸

一般木綿類の（植物性繊維）洗濯に適し、家庭で洗濯石鹸として用ひてゐるものであります。

用劑

一、牛脂　七匁
二、苛性曹達　三匁
三、食鹽　三匁

ト、豚脂石鹸

用途は牛脂石鹸と同樣であります。

一、豚脂　七匁
二、苛性曹達　三匁
三、食鹽　三匁

九、石鹸の鑑別法

明礬を用ひて試驗を致します。

一、石鹸を水に溶かした少量に、明礬を一つまみ入れる時は、上等のものは恰も牛乳狀となつて、沈澱物や固形物がなく、全體が溶解した白色の液となります。

二、右同樣の方法に依つて上部に泡を生じ、白い固まつた物が浮いてきたり、底に沈澱物の多い物は下等の物であります。

三、同樣の方法に依り、上部が白濁となり、中央が透明な液となつて、下部に沈澱物のあるものは、比較的上等の物であります。

一〇、洗濯水に就いて

水には、石鹸を容易に溶解するものと、不溶解のものとがあります。前

者は清浄な水で、軟水と言ひ、後者は鐵分、石灰、鹽分其他の不純物を混入する水で硬水と言ひます。洗濯には軟水でなければ、垢を十分取り去る事が出來ません。依つて若し硬水の場合はこれを軟水として用ひます。

軟水にする方法

明礬茶匙四杯、曹達茶匙五杯、アルコール小盃一杯を、硬水五升に入れて、暫時放置して置きますと、不純物は沈澱し、上澄は軟水となります之を洗濯に用ひると、石鹸は容易に泡立ち、垢が落ち易くなります。

其他、手輕な方法としては、一度湯とする事であります。湯で洗濯すれば石鹸がよく效き、垢がよく落ちるのは軟水になつたからであります。

第二節　洗濯の準備及び心得

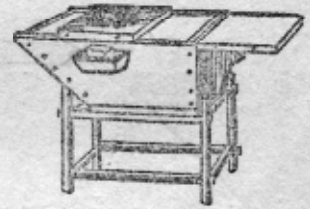
一、蹋み洗濯より立脚洗濯へ

生活改善に伴ひ衣服や臺所の研究は、中々進歩致しましたが、洗濯法や洗濯器の改良應用は何故か、一般に顧みられて居ない樣であります。例へば洗濯には鹽が附きものと思つて、今でも蹋み洗濯を續けて居ますが、之は時間が餘計かゝるばかりでなく、衛生上にもよろしくありません、長時間蹋んで居ると、冷性の婦人、殊に妊娠中の婦人には、恐るべき結果を來し易うございます。尙脚氣、消化不良(胃腸壓迫)痔疾の原因ともなることがあります。それで病氣を起さないまでも痺が切れるとか、足腰が痛いとか、一時的の苦痛を伴ふ事は、誰しも經驗する所であります。

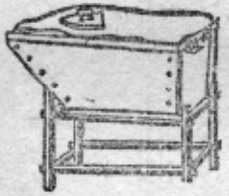
第一圖

第二圖

第三圖



第四圖



其他下駄、足袋、着物が汚れ易くて、洗濯が億却になる事も慥かに踞み洗濯の缺點であります。かう考へますと是非之は立脚洗濯に改める必要があると思ひます

5) 二、改良洗濯盥

上圖の洗濯器は前述の樣な諸點を考慮して工夫したものであります。

第一、立つて洗濯が出來

第二、洗濯板が動かない裝置になつてゐます（適當な傾斜に嵌め込んであります）から、思ひ切つて揉む事が出來ます。（第二圖）

第三、石鹸容器が附いて居ますから便利です。（第二圖）

第四、洗濯板で揉み乍ら、汚れや汚點を發見した時、回轉式の板の上をブラッシュで擦する事が出來ます。（第二圖）

第五、回轉式の板を外の方へ下せば洗濯物の置場となり（第三圖）

第六、乾いた物に火熨斗やアイロンを掛ける樣になつてゐます（第四圖）

第七、臺枠が全部取り外して、箱の中に收める樣になつて居ますから、持ち運びに便利であります。（第四圖）

斯の樣な洗濯器を一つ購求するか造らせるかして置く時は、手輕く氣輕に短時間で目的を達する事が出來ます。

第五圖

三、干綱を用ひよ

此迄は多くの家庭で竹竿を使つて居ましたが竹竿だと袖を通す物は便利ですが、敷布枕掛等の止處の無い物は、風が吹くと干物が片寄つたり、落ちたりして折角洗つた物が汚れます。又澤山の洗濯物を一時に乾す事が出來ません。其の不便を避ける爲に、干綱を用ひた方がよいと思ひます。（第五圖）

干綱は太い麻繩を二本撚り合せて、固定した二本の杭の間に引張り、中途で綾む樣でしたら又棒で支へておきます。洗濯物はその撚り目に

狹むと、落ちる氣遣もなく安全に乾す事が出來ます。尙一本の干綱でも可成り多く乾す事が出來ます。

四、石鹸の使ひ方

洗濯する人達の多くが、洗濯物を水に浸すと、直ぐに固い石鹸を擦り付けて、局部的に揉む習慣がありますが、洗濯法としては幼稚な遣り方であります。石鹸を付けて揉めば落ちるに違ひありませんが、此の仕方は石鹸が無駄になり、手を痛め、布を弱める等不利益な點が多々あります。また石鹸の機能は汚れの部分に觸れたからと云つて汚れを直ぐに分解するのでなく、石鹸の機能の表れるまでには、相當の時間を要します。最も石鹸を有效に使ふ方法は石鹸に熱を與へると云ふ事であります。何人も知つてゐる樣に湯に溶いた石鹸液は、水に溶いた物よりも垢が落ち易くなります

妻大圖

然し更に石鹸液に付けて洗濯物を蒸す時は、一層其效が著しく認められます。

五、有效なる洗濯法としての蒸洗ひ

洗濯は水洗ひより温湯洗、煮沸洗ひの方がよく落ちますけれども、其れよりも、もつと布を痛めないで、有效な洗ひ方としては、蒸洗ひに限ると思ひます。一般家庭では餘り用ひられてゐませんが、是非實行なさることをお奬め致します。煮洗ひで落ちない様な汚でも、蒸洗ひで落ちた例は珍らしくありません、煮洗ひは始め、石鹸やソーダ液で豫め洗つて置いて、垢を落して置かないと、其の布の垢が石鹸液に泌み出して、其の汚れた石鹸液の爲に、布が垢浸みると云ふ様な例もあります（石鹸液を取り換へねばならぬ）が蒸洗ひは其の憂がありません。

六、白木綿の蒸洗（幕、敷布、枕覆ひ、足袋等）

最初に水洗ひを致します。なぜならば汚れのある物を直に熱い石鹸液に浸しますと、汚れで黑ずんで、最後によく濯いでも色が何となく、鈍つて仕上りがよくありません。

又洗濯物の中に血液や（蚤の血其他血液の汚點）其他の汚點のある物を熱い湯に浸す時は、血液や汚點が取れなくなります。（血液が湯によつて落ちなくなるのは、蛋白質が纖維の膠質と化合するに依るのである）。又糸屑色素等の色が布に染め付いて取れ難くなつたり、又汗や垢の中には、鹽分が含まれて居ますから、水洗ひをしないで直ぐに熱い石鹸湯に入れると、石鹸の機能を妨げる事になります。ですから石鹸湯に浸す場合は、一度水洗を致します。其の仕方は、

一、先づ洗濯物を全部冷水に浸し、ひどく汚れて居る物は、洗濯曹達の溶液を加へます（灰汁を代用するも良し）其中で上汚れを洗つて落し、堅く絞つて、次に

二、敷布一枚に對し、粉石鹼を盃一杯、水三升の割合で全部の洗濯物を其液の中に浸し、輕く絞つて蒸器に入れて、一時間位蒸します。此の方法によると蒸汽の爲に、汚れや汚點は落ち易くなつて居ますから、石鹼湯の中で全體を揉み洗ひとし、特別の汚れ（袖口襟、足袋底）は刷毛に石鹼液を付けて擦ります。次に

四、石鹼氣が殘らぬ樣に充分に濯ぎ、綺麗な物は其の儘乾し、尙色の黑ずんでゐる物や、汚點のあるものに漂白法を行ひます。

第三節　糊付に就いて

一、木綿の糊付の仕方

糊付物の色合や地質の厚い、薄いに依り、又用途の如何に依つて糊を選ばねばなりません。

（イ）　薄色物は

一、吟生麩　三匙半（十匁）　二、布海苔五匁、水三升位

（ロ）　色物は

一、吟生麩一匙半（五匁）　二、布海苔十匁、水三升位

（ハ）　無地物

一、布海苔十五匁　水三升位

右の分量に依り、先づ水に糊を入れて煮立てゝ、斑の無い樣充分に攪拌して、溶けたならば漉袋で漉し、糊の中に浸して、丁寧に糊を揉み込んで乾します。

丸洗ひ、其他のもので鏝仕上げを仕樣とする物は、物干竿又は麻繩に掛けて、大體形を整へて乾します。

板張仕上げをする物ならば布に糊をよく揉み込み、輕く絞つて、張板の上の方から張り始めて下に引き伸し、布目が弛まぬ樣に布の中程を上から下に向つて刷毛で撫ら乍ら張り付け、更に中程から、左右に、斜下の方に向つて、糸目を正して、鏝を伸して張り付け、次に水刷毛をかけて清め、表面は浮き出た糊を平均させます。

此の時別に濕布で表面を拭つて、餘分の水氣や糊を取り去れば、仕上げ

が綺麗になります。

次に風通しの良い所に、時々裏表、上下の位置を換へて乾し、乾いたならば、端の方から幅に沿ふて剝ぎ取り、縞目、又は布の形の歪まぬ樣に致します。

二、絹織物の糊付の仕方

洗濯を終へた絹物に糊を必要とする時は、次の糊の材料を選びます。

一、普通着尺絹織物には

ゼラチン八匁、吟生麩二匁、水三升の割合にします。又布海苔九匁を水三升の割合に解いた物を、用ひても差支へありません。

繻子は、トラガカントゴム十五匁に、ゼラチン四匁、水三升の割合に致します。

羽二重、タフターの如き薄地のものは、ゼラチン五匁、二枚位を煮溶し水三升位に延して用ひます。

斜子、綸子、鹽瀉の如き稍厚地の物は

一、ゼラチン六匁(二枚半)吟生麩九匁(三匙)水三升の割合に致します

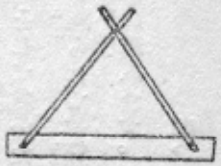
それ〳〵織物に依つて材料を用意し、分量だけの水に煮解かしてよく混ぜて、滓の出ない様に、斑の無い様に溶き、布で漉し、羽二重、博多の様な平組織の物は、霧吹器で糊を吹き掛けます。

解き洗をした物は、裏から糊を刷毛で引き

丸洗ひをした物は、糊の液中に浸して絞り上げ、七分通り乾すか、全く乾かすかして後取り入れます。仕上はアイロン又は鏝を用ひます。

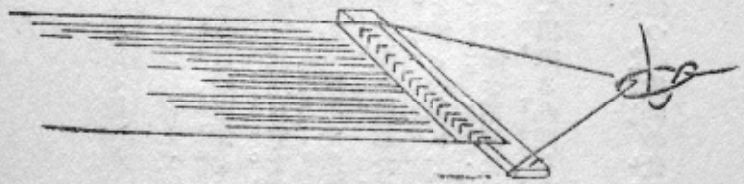
三、出來榮へのする簾張

第六圖



第七圖

第八圖



一反の長さに縫ひ合せた布を水洗の後、兩端に縫付けた布切の處を、桁の釘に掛けます。桁は中幅用、大幅用とありますから、其洗濯物と適合したものを選び、幅を伸し一方に片寄らぬ樣に、一端を針にとめ、他端を鏤めて位置を確定した後、一端から次々の針に鏤めます。(第八圖)

釘を用ひた桁によらぬ時は、上圖の如く輪にした布に張物を縫

ひ付けて張るのであります。(第七圖)簇張が一般に用ひらる。居ますが、成績は前者が好い樣です。いづれにしても引手の糸が三角になる樣に繩に結べば固定致します。次に布目の兩側を一尺五寸位隔てゝ、飛簇を張ります。繼ぎ目のあるものは繼いだ所に簇を用ゐます。

簇を張り終へたものは裏から刷毛で糊を引き、空刷毛を掛けて糊を平均させ、表から水刷毛を掛け、浸み出した糊を平均させ、糊斑の出來ることを防ぎます。それから簇と簇との間に、一寸位の距離に簇を入れて乾します。そして乾いた後、簇を取除き兩耳に霧を吹きかけるか又は水刷毛で兩耳を濡らして、簇によつて出來る凸凹を直します。そして桁を取つて一定の形に疊みます。

四、光澤を保つ絹織物の仕上

絹織物の仕上にはアイロンか湯伸仕上かを用た方が宜しうございます。

一、アイロン仕上

(イ) 洗濯を終へて水洗ひした後、糊入の有無に拘はらず、忙しい時は乾かさずにアイロンをかけますが。其の際は乾いた白木綿に其の布を巻きつけ、水分を白木綿の方へ吸收させまして、白布の上からアイロンをかけて後風通しのよい所で乾します。

(ロ) 七分通り乾いたものは、直にアイロンをかけて差支ありません

(ハ) 全く乾いたものならば、水を含ませて巻き、暫く其儘にして水分を平均させます。次にアイロンを燒き裏からかけて光澤を出ます。

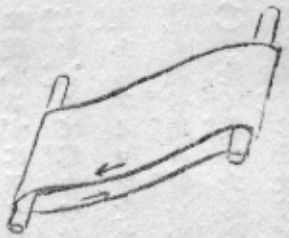
疊み方は反物の心棒の樣な物に巻くか、滑かな板に巻き付けます。

二、湯伸仕上

手觸りよく外觀を美くしく保つには、アイロン仕上、板

張仕一等よりも湯伸仕上が適當であります。

先づ湯伸釜に水を沸騰させ、小切ならば、其四隅を手でつまみ、吹出口に觸れつゝ、一端から他端に、湯氣を通します。長いものならば、兩端を縫ひ合せて輪となし、丸棒を通して、二人で湯伸釜の兩脇に立ち、下の方から上の方へ回轉しながら、輕く吹き出し口に觸れしめて左右に振り、布を回轉しながら、湯氣を通します。



第四節　色留法

洗濯すると色の出るものは、豫め其纖維に依つて色留法を行はねばなりませんせん。

一、木綿物の色留

木綿物（一般木綿、及びボイル、リンネル、綿呂等）

一、水三升に食鹽茶匙三杯、燒明礬二杯の溶液中に、十分問浸して其儘乾します。洗濯の必要あるものは直ちに行つて、差支へありません。

二、絹地廉物の色留

絹地の廉物（特にオリーブ、藤色、紫紺、紫、海老茶等の色）

廉物は鹽基性染料で染めてあるのが多いから汗が出るとすぐ着物等に附きます、染料を固着させる爲には次の方法を行ひます。

タンニン酸茶匙二杯を熱湯で溶き、水三升位に薄め（高濃を用ひざること）其中へ布を十分問位浸して置きます。

三、絹地高價の物の色留

上等の絹地には酸性染料が用ひてありますから、次の方法に依ります。水三升位に醋酸五、六滴を入れ、其中に布を浸し濯ぐ樣にして取り出して乾します。

四、毛織物の廉物の色留

グリスリン、四五滴　タンニン酸、小匙二杯を水三升に溶き十分間位浸して乾します。

五、毛織物の高價の物

醋酸五、六滴とリスリン、五六滴とを水三升に溶かし、其中に十分間浸しで乾します。

六、染料の種類に依つて其色留に用ゆる藥品

一、基性染料で染めた甲斐絹、紅絹で色の出るもの廉物のモス類等はタンニン酸を用ひます。

二、直接染料で染めた木綿、瓦斯、手拭浴地等は、明礬を用ひます。

三、酸性染料で染めた、羽二重、絹布類は醋酸を用ひます。

七、黑、紺サージの洋服の色留

黑、紺サージの洋服でアリザリン染料を用ひてあるものは、硫溶鐵、五匁位を少量の湯に溶し、五六升の水に薄めてそれに醋酸を（なめて酢いゝ位）入れた液の中に、二三十分間以上一時間位つけて置きます。絞らないで日光に乾します。

又硫化染料で染めてあるものは火熱に當てるとぎちぎち致します、此の色どめは

第一法

タカジアスタゼー二匁（茶匙山盛り一杯）を四五升の水に溶かしたものに、十分間位浸して其儘乾します。

第二法

苦鹽及びタンニン酸を各々茶匙一杯づゝを四五升の水に溶した液に十分間位浸しそのまゝ日光に乾します。

八、紺絣（伊豫、久留米、薩摩）

アリザリン染料を用ひるのが普通ですから、醋酸四五滴と硫酸銅（タンバン）一錢銅貨位（約一匁）を湯で溶かして四五升の水に薄すめた液の中に、十分間位浸して置きそのまゝ取上て乾します。

九、硫化染料に依る各纖維の色留法

硫化染料は硫黄に依つてのみ色留が出來るのでありますが、硫黄は、湯や水に溶けるものではありません、從つて此理を實際に應用する事が出來ませんから、人造硫黄を製し溶液として用ひます。

人造硫黄の製法

硫酸鐵、タンニン酸、亞硫酸、蓚酸、

右の藥品を各々二匙位を熱湯で溶きます。これで人造硫黄が出來るのであります。

一反に付　水三升に人造硫黄五匁を入れて、其液に浸しそのまゝ乾します。

第五節　各種和洗濯

一、木綿及び瓦斯の洗濯法

一反に對し重曹を茶匙に、一杯入れ、其中に浸して置き、次に

一、水一升二合　炭酸曹達を茶匙に二杯入れ、毳毛に液をつけて、板の上に布を擴げ擦り乍ら洗ひ、水洗ひして薄糊をして、張板に張つて乾します。（白地の時は石鹸洗ひを致します。）

丸洗ひ

水三升に、重曹を茶匙に一杯入れ、其中に浸しておいて、後、水五升に炭酸曹達四杯の溶液を作り、其の中で輕く揉んで洗ひ、肩當の處や、白地の付けてある處は、石鹸を付けて洗ひます。この方法に依れば洗ひ晒しが見立ちません。

二、木綿縮及び明石の縮まぬ洗ひ方

新らしい時に先づ簇で張り、アラビヤゴム茶匙に一杯を熱湯で練る樣に溶き、其れを水一升位に薄めて、刷毛で其液を引き、乾いてから霧を薄く吹いて必要の幅に縮ませます。そうして置きますと仕立てた後、雨に濡れても、洗濯しても縮む憂はありません。

洗濯法は木綿物と同樣であります。

三、人造絹糸の洗濯

之は水に弱くて洗濯に適せぬものとして不自由を感じて居りますが左の方法に依る時は、完全に汚垢を取り地質を害する事がありません。

一、アルコール（又はエーテル）四五滴を水五合に溶いて其液に浸して置きます。

二、水八合に、リスリン及び、アルコールを各々二三滴づゝ入れ其の中

に浸し、泡立つ位の石鹸の溶液を刷毛につけて洗ひ、

三、水濯ぎを充分にして、

四、水五合にアルコール、四五滴の溶液中に浸して其まゝ乾します。

又色の變つたものは右の液に、蓚酸を茶匙半分を熱湯に溶かして、加へたものに浸す時は元の地色となります。

四、富士絹の洗濯

富士絹は光澤を失ひ易いものですから、マルセル石鹸の微温湯の溶液にモノポール油を少量加へた中で、手早く洗つて水洗ひをして乾します。

五、白地の絹毛類の洗濯

（ネル、セル、メリヤス、羽二重、絹等の白きもの）

すべて白い絹毛類は、普通の洗濯石鹸や洗濯曹達を用ひますと、石鹸の

アルカリ性の爲に、何となく黄味を持つて、古物の樣になり易いものでありますから、マルセル石鹸の微温湯の中で洗つて充分に水濯ぎをした後、醋酸液（水三升に四五滴）に浸してから、日光に觸れ無い樣に、風通しの好い處（醋酸液によつてアルカリ性を中和します）に、蔭干に致します。

洗濯に依つて白地が黄味を持つて、見苦しくなつた場合は、酸性亞硫酸曹達の漂白を行ひます。其の仕方は、

一、水二升に亞硫酸曹達五匁内外の溶液を作り、二三時間浸し、次に

二、水二升に硫酸十匁内外の溶液を作り、硫酸を薄める時は必ず、水の中に硫酸を少しづゝ垂らします。反對にすると熱を發し危險であります

その溶液の中に、三十分位浸します。

六、銘仙、糸織、高貴織、八端の洗濯

一、一反に對し、水一升二合、普通曹達茶匙二杯、炭酸マグネシユウム茶匙一杯を入れたる溶液を、刷毛に付け擦すり洗ひを致します。襟の油浸みてゐる處には揮發油を付けて、半襟の洗ひ方と同樣にして、次に右の液で洗ひ水洗ぎを十分して乾します。

洗濯液に藥品を用ひず其代りとして、布海苔、三四枚を煮溶かして、湯で薄め、それで洗ふ時は、失敗することがありません。洗濯を終へて水濯ぎしたものは仕上水を通します。

二、仕上水

水三升位に醋酸、三四滴を入れて、其中に浸して水氣をきり、絞らないで次に糊付を致します。

三、糊付一反に付き

ゼラチン一枚の割合に熱湯に溶かして、其れを水八合位に稀めて、別の器に移し、布全體に滲込ます樣に糊付けを致します、此時の絞り方も前述と同樣にして、乾いた後、霧を平に亘る程度に吹いて、アイロン仕上を致します。

絹の夏羽織、可部御召も同方法で洗ひます。

七、大島、米流、結城、の洗ひ方

之等は中性の洗液を用ひます、就中椿油の滓が良いのでありますが、家庭で求め難い時は、左の方法に依ります。

一、水三升位に、食鹽茶匙一杯の溶液中に浸し、次に

二、米の濃い磨汁を（又は米糠三合を水一升位に入れて溶いたもの）刷毛に付けて洗ひ、水濯ぎして、最後に、リスリン、二三滴を水、二三升位

に入れ、其中に浸して絞り、水氣を切り、次に糊付を致します。

三、糊付、ゼラチン一枚を湯に溶し、水八合位に割り、其中に浸して乾します。乾いたら霧を吹いてアイロンを掛けます。

（注意）普通絹布には醋酸を用ひますが、之等の布地に用ゆる時は色が褪せます。

米の磨汁の代りに布海苔三枚位を熱湯で溶き、溫湯二升位に薄めたものを用ひても結構であります。

八、大島、米流の襟の拭き方

之等に用ゆる染料は、特種の染料で、澁木エキスと云ひ、澁の出る木を水に浸して其澁を取り、纖維を染めたものであります。先づ、鉛白の付いた所は、オレフ油を筆で引き其上に、ベンジン油を注ぎ空氣に觸れない樣

に揉みます。鉛白の付いてゐない時は、直にエーテル又はベンジン油で拭きます。

九、白羽二重、白リンズの半襟の洗濯

一、揮發油を汚した部分に注ぎ、空氣に觸れぬ樣に掌で揉み洗ひ、次に

二、石鹼液（マルセル石鹼二匁を溫湯五合に溶かす）で洗ひ

三、水濯ぎをして、漂白の必要ある時は

四、漂白法

熱湯一合に蓚酸、茶匙半分を入れ其の溶液に浸し、水濯ぎして乾します

（蓚酸の代りに白性と云ふ漂白粉を用ひても結構であります）

一〇、琥珀、博多の洗濯

一、タンニン酸、茶匙一杯を熱湯に溶かして、水二升位の中に入れ、其

中に浸し、次に

二、水一升位に曹達茶匙に、二杯と、リスリン三、四滴を入れた溶液を作り其中で洗ひます、石鹸を使用する場合は、マルセル石鹸を用ひます。

三、水濯ぎを充分にして

四、仕上水は水二升に、醋酸、四五滴を入れた液を作り其の中に浸して絞らずに乾します。

五、アイロン仕上

水三合にリスリン、二三滴を加へたる溶液の中に、ハンカチ又は小布を浸し、輕く絞り、霧吹の代りに捺すつて、濕氣を與へて、アイロンを其上から掛けます。

（注意）すべて、琥珀、博多に限らず、地質の厚いものは、リスリン水に

浸した布で拭つて濕し、アイロンをかけますと、小皺がよく延びます。

一一、繻子の洗濯（黑、紺、鐵、鼠等の色）

一、水一升二合に、曹達茶匙一杯、リスリン二、三滴、炭酸マグネシュームを茶匙一杯の割合に溶かし、其溶液で洗ひます曹達とリスリンの代用に米の磨汁を用ひて宜敷うございます。

二、其他色物の場合

水二升に、タンニン酸二匙（タンニン酸の代用として茶の煎汁の濃液を入れるもよし）を入れ其の溶液中に浸し、次に石鹸液にリスリンを少量入れて（但しマルセル石鹸の場合はリスリンを除くも可し）其液で洗ひますリスリンの代りに米糠を用ひても差支へありません。水濯ぎは丁寧にして仕上水は水一升に、タンニン酸茶匙一杯を熱湯に溶かして、其れに醋酸二

三滴を入れ、其中に浸して疊付ける樣にして絞り日光に乾します。

（附記）

リスリンは艶を出し、汚れを浮かし、布を軟げ、皺を延ばす役目を持つてゐます、醋酸、及びタンニン酸は色を止め、艶を出す作用を致します。

一二、支那緞子、珠珍の洗濯

これ等は植物性の永久對久力のある、安否茶背染料を用ひた物で、之れを洗ふ事は專問家でも難づかしいとしてゐましたが、左の洗濯法に依れば褪色しない事を保證致します。

一、水二升に　單砂利別と、重曹を各々茶匙一杯づゝ入れ、其液中に浸して洗ひます。但し白地の部分は石鹼を使用しても差支へありません、水濯ぎを充分にして次に

二、仕上水　單砂利別茶匙半分を、水二升位に溶いた液に浸し其儘乾します。

一三、紅絹の洗濯

一、水二升位に、醋酸、二三滴を入れ其中に浸し、水濯ぎして更に水一升に曹達と硼砂末を等分に（茶匙一杯半位）入たる液で洗ひます。

別法

醋酸を用ひて色の出るものがあります、之は酸性染料で下染をして、鹽基性染料で上染めをしてあるものですから、酸の爲に上染の鹽基性染料が落ちるのであります。それで此の場合はタンニン酸、茶匙一杯を熱湯に溶かし其れに明礬少量入れ、其溶液の中に浸して次に曹達と硼砂粉末の溶液で洗ひます。

一四、縮緬及び錦紗の友禪物の洗濯

一、水三升位に醋酸、三四滴を入れて其液の中に浸します。そうすると きは色留ともなり、垢が落ち易くなります。次に、

二、マルセル石鹸（又はモノポール石鹸）を水又は湯に溶し、溫湯一升に石鹸十匁位ご刷毛に付けて洗ひ水洗ひを充分にして

三、醋酸水に通して乾し、湯伸で仕上げを致します。

但し白地物の場合は第一法を省きます。

一五、明石縮、お召の洗濯

一、米の磨汁一升に、マルセル石鹸二匁を加へ、この液を刷毛につけて洗ひます。

米の磨汁の代りに、椿油の滓（一合を湯一升に煎じ出したもの）又は

豆腐汁で洗ひ、

二、水濯ぎを丁寧に致します。

三、仕上げは縮緬、錦紗と同じであります。

一六、鹽瀬、羽二重の色物の洗濯

一、水三升に醋酸三、四滴を入れ、其中に浸し、次に

二、マルセル石鹸（普通の洗濯石鹸ならば、グリセリン二三滴を入れる。を泡立つ位に溶かした液中で、掴む様に洗ひ、又は布を平らに置き、刷毛で擦すり落し

三、水濯ぎを充分にして乾し

四、霧を吹き、アイロンで皺を延します

一七、甲斐絹の色物の洗濯

一、水一升に、タンニン酸（濃き茶汁にても可）茶匙半分を入れ其中に浸し後

二、アルセル石鹸の液中で洗ひ（普通の洗濯用石鹸ならばグリセリン二三滴入れること）次に

三、水洗をして日光に乾し、霧を吹いてアイロン仕上げを致します。

一八、天鵞絨、絹天、唐天、コール天の洗濯

右の種類は表の毛並が、よれ〳〵になるので、洗濯屋も六ケ敷しいものとしてゐますが、左の方法に依る時は、固有の美を保つ事が出來ます。

布團、寢巻、子守袢天等の襟に用ひた物は、油や垢が付いてゐますから其の部に

一、揮發油をつけて揉み洗ひをして、次に

二、メリケン粉を表一面に振りかけ、其粉を落さない樣に其のまゝ、包み込む樣にして卷き強く二、三回振り、次に

三、米の磨汁（又は糠）でつかむ樣に洗ひ

四、水濯ぎ二、三回して

五、醋酸水（水一升に醋酸三滴位）に浸して、絞らないで二、三度空中で振り、表を上にして日光に乾せば毛並が生〳〵と立つて新らしいものゝ樣に出來上ります。

一九、モスリンの縮まぬ洗ひ方

（但し色の出ないモスリン、白モス、毛織洋服等）

毛織物はアルカリの強いものに依ると黄色味を帶びたり、縮んで、毛立つたりして古ぼけてまゐります。然し次の洗濯法に依る時は再び新らしい

ものと同じになります。

一、水二升に、リスリン、三四滴の溶液に浸し。次に

二、マルセル石鹸を水に溶し、汚れの程度に依つて濃度を加減して、其中で掴む様に洗濯し

三、水濯ぎを充分にして、再び第一の方法に依り、リスリン液に浸して乾し、

四、霧を吹き、アイロンをかけます。

二〇、毛糸のスエーターの洗ひ方

總べて毛糸の編物は洗濯すると伸縮し易いもので丈が延びたり袖が元の長さの二倍になる様な事があつて、しかも、それを容易に原型に還す事が出來ないので困りますが左の方法に依れば其氣遣がありません。全體毛織

物の洗ひ方としては始から終迄溫湯で取扱ふ心掛が必要であります先づ塵や埃を拂つて次に

一、良質のマルセル石鹸の溶液（微溫湯三升位に石鹸梅干大のもの二つ位を入れて溶かした液で洗ひ（又は微溫湯三升位に硼砂末茶飲茶碗一杯の溶液で洗ふもよし）更に

二、微溫湯で充分に水すゝぎをして

三、乾す時に注意してザルか金網の様なものに形を整へて干します。そして上面が乾いたら今度は下面の方を上にして乾します。（竿や衣紋竹で乾すと水の重みで延びます）

二一、毛メリヤスの縮まぬ洗ひ方

毛メリヤスは、素人が洗濯すれば縮み易いもので大底クリーニングに出

して居ますが、右の方法に依れば縮みません。

毛の爲に最もよい方法は

一、微温湯五升位に硼砂末を茶飲茶碗に一杯入れた溶液を作り其の中で洗ふことです。（又はマルセル石鹸を微温湯に溶かした液の中で洗ひます）

次に

二、微温湯（又は日向水ですゝぎ、胴や袖の縮まぬ樣に袖先から胴の裾を一貫に竿に通して乾します。

二三、毛皮の洗ひ方

手袋、襟卷、手提袋等、本毛皮のものは左の方法で洗ひます。

一、米の濃い磨ぎ汁一升の中に十分間位浸し

二、メリケン粉十匁、ベンジン油、四、五滴、アンモニヤ水、四五滴の

溶液を米の磨ぎ汁に混ぜて、其液中で揉む樣にして洗ひ水濯ぎして更に

三、米の磨ぎ汁の中に十分間位浸して堅く絞り、次に水五合に白砂糖茶匙一杯を溶かしたものを霧吹器で吹き、

五、乾いた地厚な布の中に丸め込んで踏み、水分を吸收させて日蔭に乾します。そうすれば毛皮固有の軟かい性質を保つ事が出來ます。そして生乾きの時に取り入れ軟かに揉んで置きます。

（注意）米の磨汁を用ひませんと皮が堅くなります。

二三、毛並を美しくする毛織物の仕上方

一、毛織物は丸洗ひしたものは霧吹きをして鏝で仕上げを致します、すべて毛織物に鏝を掛ける時は、直接にかける事を避けます。なぜなれば縫目又は布が二重になつてゐる處ばかりが光つて、見にくゝなるからであり

ます。

二、解き洗ひをしたもの、又は普通の布は湯熨斗仕上げを致します。

三、白毛布の様なものは乾燥してから、周圍の縁だけに鏝をかけて、外は刷毛で一定の方向に毛並を揃へます。

（ネル類は仕上げの後、起毛器を一定の方向に掛けて毛並を揃へます。起毛器としては針金製のブラッシ（刷毛）が宜敷ございます。

第六節　各種洋洗濯

一、米國式の家庭向クリーニング

材料一般毛物類即ちメルトン、羅紗、スコッチ、サージ、セル等の洋服其他東コート等に用ひます。

無水クリーニングとも申しまして、藥液の蒸氣で、蒸し洗ひする方法でありまして、これは最も有效で經濟であります。

蒸器に（石油罐を用ゆる時は、ブリキの輪を中に入れて其上に穴のあるブリキ板を乘せて、其中に材料を入れ蒸します、或は御飯蒸、蒸籠を代用しても差支ありません。

其仕方は洋服の上着一枚に付き水三合位を入れ、これが熱湯になつた時

（イ）硼砂末　茶匙一杯

（ロ）ベンヂン油　七、八滴

（ハ）酢酸　三、四滴

（ニ）右の順序に入れ　最後に

（ホ）重曹　一匙

を入れ、直ちに材料を入れて、蓋をして蒸器の縁が熱い位になつた時引出し、風に當てると直ぐ乾きますから、乾いたらアイロンでさつと仕上致します。

附記　揮發油のみを使用すれば、一升餘も費しますが此の方法は少い藥品で完全に行はれます。

二、佛國式クリーニング

一、熱湯三合位に

エーテル　四、五滴　重曹　茶匙一杯

右の分量で方法は米國式と同樣にして、此の蒸氣を利用して、洗濯材料を蒸すのであります。

三、英國式クリーニング

一、熱湯三合位に

アンモニヤ水　三、四滴　醋酸　三、四滴

重曹　茶匙一杯

右の藥品液の蒸氣をもつて、同樣の方法を致します。

大抵の汚れた洋服などは、右の方法を時々應用致しますといつも垢の落ちた洋服を御召しになる事が出來ます。

四、麻洋服

一、水三升に、曹達茶匙二杯を入れ、其中に浸して置き、次に水三升に粉末石鹼三匙位を溶かした石鹼水の中で、擦む樣に輕く洗ひます、漂白の必要あるものは次の方法を用ひます。

二、水三升に漂白粉茶匙三杯と、重曹を茶匙に二杯とを少しの水で溶き、

布袋で漉し、其中に、二、三十分間位浸して置きます。

三、水濯ぎを充分にして、醋酸水（水三升に醋酸二三滴）に浸し、臭氣を去り、次に糊付けを致します。

四、洋服一着に付き　コンスターチ　茶匙、二三杯を水四合位に溶き、熱湯を注ぎ入れ、糊になつたら更に水八合位に延して糊付をして乾し、霧を吹いてアイロンで仕上をします。

五、カラー

一、糊落し

水又は湯の中に曹達を少量入れまして、糊氣を揉み落します。次に石鹸洗ひを致します。

二、石鹸洗

水一升に對し粉石鹸を茶匙に三杯位を溶し、此液で洗ひます、最も汚れた部分は、刷毛で擦り落し、水濯ぎして、色の惡いカラーは漂白致します。

三、漂白法

水一升にホワイトローズ、又は、カルキ茶匙に二杯位を溶かし、其の中に五分間位浸しておいて、取出して（漂白の必要のない物は直ちに糊付けをします）二、三回水濯ぎして最後の濯ぎ水に、醋酸、二三滴を入れて濯ぎ、堅く絞ります。

四、糊付

吟生麩を茶匙に、五杯を水一合位に溶かして、其中にアッキス若しくはアラビヤゴム茶匙半分位を入れて、よく攪拌して、其液の中で洗濯する時

の様にして、糊を揉み入れ堅く絞ります。

次に奇麗な布で、表裏を拭き取り、白い布の中に丸め込んで水分を吸收させます。

五、仕上法

カラーの裏面から、布が平になる迄アイロンをかけて、それから裏表交互にカラーが乾いて堅くなるまで掛けます。

六、艶出し

カラーの表面にヤマト糊（又は生麩の煮糊）を刷毛に付け艶を出す部分に引糊して、濡れた布で糊を拭き取り、粘り氣がなくなつたら、アイロンの尖端若しくは、鏝先でこする様にかけて艶を出します。

六、ホワイトシャツ

洗濯の方法はカラーと同一でありますが、ホワイトシャツの糊付は、襟と胸の處は糊を薄加減に付けて胸ボタンの部分には糊の付いた布を以つて一度ぬ拭ふ様にして拭き袖を脊中で合せて、小じんまりと畳んで、重石、又は手足で強く壓して、全部に糊の濕氣を滲ませてから、背、襟、袖、身頃と云ふ様にアイロンを掛けます。

アイロンの掛け方は、練習程度に依つて出來上りに影響しますから、繰り返し熟練することが肝心であります。

七、普通シャツ類

洗方はホワイトシャツと同様で、糊を付ける必要はありません、若しアイロンを用ゆる場合は霧を吹いて掛けます。

第七節　附屬品其他

一、鳥打帽子の洗ひ方

一、水一升に、粉石鹸（日の出印がよろしい）茶匙三杯の溶液を作り、ツバのところを左手に持つて右手で帽子の後部を握り、軟かくざぶ〳〵と洗ひます。ツバが汚れてゐる時は、形を痛めない樣に支へたまゝ、兩面を石鹸液を付けた刷毛で軟かく洗ひます。

二、水で石鹸の出ぬ迄濯いで

三、醋酸液（水一升に醋酸三滴位）に浸して、ツバの處を壓して水氣を去り、鳥打帽子の形に整へて布に包み、上から足で踏み、布に水分を吸收させて、日光に乾します。

二、羅紗帽子の洗ひ方

頭に當る部分で、最も油汚れのしてゐる部分に、オレフ油塗り、揮發油を刷毛に付けて拭き取り、全體の付れは揮發油を脱脂綿に浸して、塗り乍ら拭ひ去り、次に軟かい布又は綿を帽子の形に丸めて、帽子をかぶせ、水に浸した布を當て乍ら、形を崩きぬ樣に鏝を掛けます、（帽子型として出來てゐるものがありますが、家庭では右の仕方でも出來ます）

緣は其の形に添ふて、白の濡れた布を當て其の上から鏝を掛け乍ら形を整へます。

三、半襟　手柄の洗ひ方

汚れを分類すると、白粉、香油、襟垢とになります。白粉の付いてゐる場合は、其處にオレフ油を筆で引き、其部分をつまんで、其上から揮發油

を注ぎ、全體を濕して空氣に觸れない樣に揉んで、濕り氣がなくなつた時強く振り、其れを風通しの良い處に乾します、それから兩端を縫ひ合せて兩方に引張り濕氣を通します。普通香油と襟垢の汚れ丈けの時は、オレフ油を使はないで、揮發油を用ひます。

手柄は大抵絞りになつて居りますが其れに香油が附いて汚れますと絞つた白い目が黄ばんで、揮發油丈けでは綺麗にはなりませんから、先づ揮發油を注ぎ、輕く揉んだならば、次にアルコールを、二三滴注ぎ、空氣に觸れない樣に輕く揉んで、風通しのよい處に乾します。

四、ネクタイの洗ひ方

先づ白糸で中央を眞直に一寸位の針目で縫をかけ、形の崩れぬ樣にして置きます。次に

一、水一合にアルコール、五六滴を入れ、其中に十分間浸して置きます。アルコールの代用に大根汁を用ひても差支へありません次に

二、石鹸を溶かした液に、硼砂末半匙を入れて其中で洗ひ、水濯ぎして顎の當る所の赤くなつたものは、酒石酸一匙に、水一合の溶液を脱脂綿又は筆で塗つて、日光に乾します。

五、白足袋の洗ひ方

足袋には泥が付き易く、泥は他の汚れよりも落ち難いものであります。尚泥は地所に依つて性質が違ひます。東京方面の泥は重炭酸曹達、二匙を水一升に溶き田舍の泥は、水一升にアンモニヤ水、五六滴入れた液を作り其中に浸し揉み洗ひして後石鹸で洗ひます。洗ひ方には洗濯板に當て、強く擦り、又はタワシ等で洗ふ時は布を痛めますから、前後及び裏表を交互

に少しづらしで、足袋で足袋を洗ふ様にすれば、汚れも落ち易く布も痛みません。

六、紺足袋の洗ひ方

紺足袋はアルカリ性の強い染料で染めてありますから石鹸で洗ふと色がはげます依て右の方法を用ひます。

水一升位に重曹を小匙一杯を入れ其の中に十分間浸してざっと揉み、裏と底は刷毛に石鹸を付けて洗ひ、又元の重曹の液に浸し、二、三回水濯ぎをして乾します。

重曹は色留をする作用もありますから石鹸洗の時の様に白けるのを防ぎます。

七、木綿の黒靴下の洗ひ方

分量や方法はすべて紺足袋と同様であります。

木綿の靴下を暫時穿いて居ると、底の方が白つぽくなりますが、それは足の裏から出る脂肪と鹽分とが染料と化合して次第に色がはげるからであります、すべて硫化染料で染めたものは斯様に成り勝ちでありますから本當は硫化染料で色止めをしてから洗濯するとよろしいのですが家庭では面倒ですから重曹で洗ひます。

（附記）靴下の保存

靴下は終日穿いて居ますから、汚や塵が固く、粘り付いて、布地が痛むよりは腐れて切れるものですから、出來得れば毎日か、でなければ度々温湯で濯ぎ出して、蔭に干して一日休ませ、其間ほかのものを穿くと云ふ様にすればよほど德用であります。

尙靴下は上部が丈夫でも、足袋が破れて使用出來なくなりますから、裏側に薄い布を縫ひつけておけば、案外丈夫であります。

八、白レースの洗ひ方

薄い曹達液の中で、手輕く濯ぎ洗をして、全體の薄汚れがとれたなら、清水ですゝぎ、湯一升に粉石鹸、茶匙一杯を溶かした石鹸液を作り其の中で洗ひます。然し軟かすぎて扱ひ難かつたり、地質の弱つたもので破れ易いものは、白い木綿の袋か、網又は白い風呂敷などに包んで洗ひます。奇麗になつたら水洗ひをして、青味をつけて乾します。干す時には竹竿にかけて、皺を伸して置けば、後で火熨斗の手數が省けます。

九、眞綿のチョッキの洗ひ方

眞綿のチョッキ、其他眞綿で拵へたものは左の方法で洗濯するときは、

白く軟かく出來上ります。先づ其方法、分量はチョッキに付いて申上げます。チョッキの塵をよくはたき、チョッキ一枚に付き

一、水三升位にアンモニア、四五滴を垂らしてよく混合せて置きます。それから其液の中にチョッキを入れて充分によく浸み込ませます。次に、

二、三升位入温湯にマルセル石鹸又はそれ以上の良質の石鹸を、よく泡立せて、チョッキを引き出して此の液に付けてよく洗ひます。洗ひ方はチョッキの襟のところを右手につまみ液に入れては出し、出しては入れて之をよく振り洗ひ、數回以上之を繰り返します。もし襟が垢や油で黑ずんだ時には、板の上に敷き良質の石鹸を付けて刷毛でよく洗ひますそれから

三、溫湯で濯ぎまして、石鹸がすつかり落ちてから絞ります、絞り方はねぢたり、捩んだりせずに、盥の底か、或は板の上で疊み、兩手で挾んで

壓しつけます、之を疊み絞りと申します、水氣がよく切れましたらば竿にかけて乾します。

四、よく乾きました時竿に掛けたまゝ、竹切等でばた〳〵たゝきますと、新しい樣に白く軟くなります。他の眞綿製品も以上の方法で處理致して宜數うございます。

一〇、蚊帳丸洗法

一、水五升位に曹達茶匙五杯を入れた溶液を作り其の中に浸して洗ひます、更に此の方法を二、三回繰り返し

二、水濯ぎを充分にして、染める必要があるときは左の方法に依ります

三、肯竹　茶匙一杯位を布に包み、熱湯に溶かして溫湯三升位に薄めて其れに酸性亞硫酸曹達を小盃に一杯位入れた、溶液の中に蚊帳を入れて、

全體によく浸み込ませ（足で踏み乍ら）其まゝ乾します。

四、緣の赤い處や、其他の色の部分は、水八合に、アンモニア、五六滴を溶かした液を刷毛につけて塗る時は元の鮮かな色になります。

五、糊付する場合は、コンスターチ茶匙十杯を水で練り、熱湯に溶かし之を洗液の中に加へて染めます。

一一、洋傘

洋傘は其綱に依つて洗濯法も異ります

一、黑味を持つ色、黑、紺、紫紺、茄子紺、鐵

二、茶味を含む色、茶、金茶、青茶、焦茶、白茶、鶯茶

三、鮮かなる色、海老茶、緋色、オリーブ其他鮮なる色白色等

一、黑味持つ色

1、一水一升に　グリスリン三、四滴の溶液を作りそれを刷毛に浸して表面に引き、次に

2、水一升にアンモニア水（又は曹達茶匙二杯、炭酸マグネシユーム茶匙一杯）五、六滴入れた液で洗ひます。

3、水濯ぎを充分にします。（不充分の時は變色する事があります）

4、最後に醋酸、三四滴を水一升二合位に溶した液を、刷毛につけて引き乾します。

注意　刺繍がある場合は擴げて洗ひ、無い時は閉ぢて洗ひます。

二、茶味を含む色洋傘

1、水一升に、醋酸、二三滴を入れた液を表全面に引き、次に

2、水一升に石鹸茶匙二杯と炭酸マグネシユームを茶匙に一杯とを入れ

た溶液を作り之で洗ひます次に

3、水でよく濯ぎ（充分にしないと色が出る）

4、蓚酸又は酒石酸少量を、湯五合に溶かし全體に刷毛で引き、水をかけて日光に乾します。

注意　折目の燒けた處は、蓚酸茶匙半分を熱湯に溶き、それを水八合に薄め、折目の筋の處に液を筆の様なもので引き、次に前の液を以て洗ひます。

三、鮮かな色洋傘

1、水一升にリスリン、二三滴の液を刷毛で引き

2、曹達茶匙二杯に水八合入れ、揮發油、三四滴（又はベンジン油）を入れ其液で洗ひます。極薄色のものは石鹸液で洗ひます。次に

3、水濯ぎを充分にして、仕上水は、水八合に酒石酸を茶匙に半分位を入れ、其液を刷毛に付けて引いて、再び水濯ぎして日光に乾します。

一二、糊抜き法

銘仙類、秩父、伊勢崎、米澤、高貴織、新銘仙等の糊氣を抜き、布を軟げ、艶を出し、保存中汚點を生ずること等を防ぐ爲に、次の方法を必要とします。

一、浴湯より少し熱い位の湯、三升位に、醋酸、三四滴を入れ其中に五分間位浸して置きます。次に

二、水濯ぎを二三回して

三、醋酸水（水三升に醋酸、三四滴）を作り其の中に浸して兩端を縫ひ合せ、棒を入れて引張つて乾します。

一三、湯通し

大島、結城、フランネル、米流、セル、久留米絣、伊豫絣、薩摩絣等に行ひます。

湯通しをすると、洗濯しても布が縮む事がなく、生地を良くして、艶を出し、折切れすることなく、雨や塵の爲に汚點を生ずる事少く、尙出來た汚點を抜き易くする等の効能があります。其の方法は

一、微溫湯三升位に、醋酸、二三滴を入れ其の液中に浸し、

二、水濯ぎを充分にして、

三、布の兩端を縫ひ合せ、兩端に棒を通し引張つて乾します。

一四、目引

目引（絹、モス類、縮緬其他一般のものに用ひます）

普通に行ふ目引

一、布を簇張の時にする樣に兩端を引き張つて置いて、熱湯一升に、タンニン酸、茶匙十杯を溶かした液を、布面に刷毛で引いて置いて、次に

二、鹽基性染料の希望の色を、一反に付、三匁位を同量の蓚酸と共に、熱湯一升五合位に浸し、刷毛で布面に引きます。すると縞目を浮かせて、色がよくなります、工夫に依ては古物を現代の流行色に直す事も出來ます。

三、模樣のある部を其まゝ殘して置きたい時は、其部に糯米（上新粉）と玄米の粉とを、湯でどろ〳〵に練り合せ模樣の上に塗り、其上に更に米糠を振つて置きますとは、染料を塗つても、此部分には染料が染め付きません。

四、布の或部を白く拔きたい時は、ロンガリット茶匙一杯を、熱湯一合

に溶かし、其部に塗ります。

一五、艶出油の製法

（イ）新銘仙、銘仙、瓦斯、糸織の類には

グリスリン三滴に、椰子油、七滴を水三升位に溶して、其中に洗濯を終へて水洗ひした布を浸して濯ぐ樣にして水氣を切り乾す時は、上光を出す事が出來ます

（ロ）大島　結城織　米澤織

グリスリン七滴に椰子油、三滴を水三升に割つて用ひますと、底光が出て來ます。

一六、疊表

一、曹達水（溫湯二升に、曹達二匙位）の中で布を揉み出し緊く絞つて

拭きとり、

二、醋酸水（水二升に、醋酸、四五滴）の中へ別の布を揉み出して拭きアルカリ性を中和させ、（黄色になる事を防ぎ）次に青味を付ます。

三、青味付

一青竹（鹽基性染料で染付のよい色）一匙を、水二升位に溶かし、それに酸性亞硫酸曹達一匙を入れて無色の液となるのを待つて、刷毛で疊に塗り付け直く拭き取つて置きます、すると空氣に觸れるに從つて青色になります。

疊表、籐表の不駄類の漂白法

一、酒石酸一匙位を、水一合に溶かし、その溶液を刷毛又は齒磨揚枝に付けて擦すり、日光に乾すときは綺麗になります。

二、右の方法の代りに、白性（漂白劑）を茶匙に一杯を水一合に溶いたものを用ひて、水濯ぎして乾すも同じ樣に綺麗になります。

一七、障子の引手

障子又は戸の手垢を落すには硼砂末一匙と、酒石酸半匙を水二合に溶き、其の溶液をタワシ、又は布巾に付けて洗ひます。

第八節　各種汚點拔

インキで字を書き損つた時、それを消す爲に市中でインキ消を賣つて居ます。それは鹽素と重曹と枸櫞酸との化合物でありますから、紙類や白地

の木綿の樣な植物性纖維には用ひても害はありませんが、毛織物、絹織物の樣な動物性纖維又は色物に用ひますと、地質を痛め、其上變色しますから絶對に用ひられません。揮發油で拭く人がありますが、そうすると却つて落難くなります。

インキを完全に拔かうとするには、インキの種類を知り、それに適切なる方法を用ひねばなりません。

一、インキの種類

（イ）コッピー屬インキ

これは丸善のアテナ、プラトン、サンエス等に屬するインキであります。

（ロ）アリザリン屬インキ

スミレ、ブラックなどであります。

（ハ）鹽基性インキ

サムライインキ、赤インキ等、鹽基性染料を用ひたものであります。

（ニ）永久不變色インキ

これはコッピー屬とアリザリン屬との兩方に屬するインキで、チャンピオンはそれであります。

インキを鑑別する手輕な方法は、食鹽を付けて見ることであります。若し食鹽に依つて赤く變色する時は、アリザリン屬インキで、何の變化もないものは鹽基性で、色が少し薄くなるものは、コッピー屬インキであります。

一、インキ類汚拔點き

(イ)コッピー屬インキ

此のインキは硫酸鐵に、タンニン酸を化合させ、それに醋酸を入れて發色させたものであります。

一、酒石酸、茶匙に二杯を熱湯二合に溶かして、其中に浸すか又は脫脂綿で塗るか、何れにしても三、四回繰り返して水です、ぎます。

(ロ)アリザリン屬インキの汚點拔き

卵の白味(強い蛋白質)を塗つて、其上をアルコールを付けて拭き水で洗ひます。

(ハ)鹽基性インキ

米の磨ぎ汁か、又は糠を一つかみ入れて、煮立たせたものの中に入れて、暫くの間浸して置いて水洗ひを致します。

(ニ)永久不變色インキ

このインキは石鹼を付けて洗ふと、赤味と同時に黑味が出來ます。其拔き方は

一、蓚酸半匙を水五勺に溶かしたものに、アルコール、五六滴入れ、其中に浸して次に、

二、石鹼で洗ひます。

色地物は酒石酸半匙を水五勺に溶き、アルコール、五六滴を入れた溶液に浸し、後石鹼洗ひを致します。

(注意)絹物、毛織物は枸櫞酸を用ひると、地質を弱めますから米の磨ぎ汁を用ひます。

(附記)インキの汚點拔を早からしめやうとするには、白色ワセリンを塗

つてから、それ〳〵の方法を施します。
之は専門家の多く祕して語らないところであります。
三、汗、尿
一、硼砂（工業用）　茶匙一杯を水二升に溶かし、其中二十分間位浸しておき、更に
二、クレゾール水に浸す時は完全に落ちます。
白地はアンモニア水に浸して取ります。色物は褪色しますから應用出來ません。
四、草類、油ピッチ
芝生に座つたり、寢轉んだりした時に、浴衣などに草の青汁が付いて洗濯しても、取り難い場合があります。此汚點を油ピッチと言ひます。先づ

一、食鹽水に浸しておいて
二、石鹼（又は曹達）と米糠との同じ分量を適當の水に溶いて洗ひます
五、果汁
桃、苺、レモン等、果物の汁の入つた飲み物の汚點は新しい時は水洗で落ちますが、乾いて古くなつたものは
一、酒石酸　茶匙一杯を熱湯一合で、溶いて、汚點の部分に塗り、水洗ひしますと綺麗になります。
濡れたところと、乾いたところの境目には、班を防ぐ爲、水で霧を吹いて置きます。
六、墨
墨は種類に依つて方法が異ひます。

(イ)墨汁

一法　墨汁はテレビン油を混ぜて製してありますから、其を拔くには先づ墨を軟げるため

一、テレビン油を充分に塗りつけて揉み、墨汁を遊離させて、石鹸を付けて洗ふと綺麗になります。

二法　揮發油を付けて石鹸洗をします。

三法　アラビヤゴムを付けて、石鹸洗ひをします。

(ロ)硯の墨

アンモニア水に、澱粉(飯糊、生麩糊、小島の糞等)を溶かして揉み洗ふ時は古いものでもよく落ちます。

附記　新しいものならば石鹸又は飯粒を塗つても取れます。

(ハ)謄寫版の墨(又は油繪具)

一、テレビン油(又はグリスリン)を付けて後、石鹸で洗ひます。

七、人血

一、大根を下し金で摺つて其汁、又は生姜の汁を汚點部に付け、暫時其の儘にしておくときは古いものでも容易に落ちます。

二、熱湯に依つて血液が黑色に變じて落ちないものは、硼砂を熱湯に溶かして五分間位浸しておきますと全く落ちます。

八、醬油

大根汁で落ちます。

九、茶、コーヒー

茶、コーヒー等の如くタンニン酸を含むものは玉葱を下し金で摺つたも

ので拔きます。

一〇、ペンキ、コールター

一、新しい汚點はテレビン油を付けて揮發油で洗ひますが

二、古い物はクロ、ホルムを付けて洗ひます（クロ、ホルムは固着物を溶解する性質の強いものであります。）

一一、油類

イ、機械に用ふる油

ロード油を筆で引き、揮發油又はベンジンを付けて揉みます。

一二、香油

オレフ油を付けて後、揮發油に浸し、空氣に觸れさせて揉みます。

一三、亞麻仁油

テレビン油を引いてベンジン油又は揮發油で洗ひます。

一四、印肉、朱肉

一、ロード油を付けて揉み、更に

二、テレビン油（又は揮發油）を付けて、掌で空氣に當てぬ樣に揉んで落ちたならば風に當てます。

一五、瀬戸物又は金物の便器が尿によつて錆を生じた時

稀鹽酸と稀硫酸とを等分に水三倍位の中に入れて（必ず水の中に此藥液を入れる事、反對に水を注ぐ時は危險です）刷毛又は棒先に雜巾をつけ（手を觸れぬ事で）こすります。

一六。亞鉛の便器のサビ

アンモニヤ水一合に、硼砂、茶匙一杯を、水三倍に薄め、其夜と別毛雜

巾につけて洗ひます。

一七、土

衣類にハネか上つた時、其泥の塊を落して、若し揉んでも差支へ無いものならば揉み、揉んでは筋の付く樣な地の硬いものはよくはたきましてから

一合の熱湯にアンモニア、四五滴位落し、其液を手拭又は他の布片を浸して絞り、それでハネの部をよく拭きます。布が冷へては取れませんから一度で取れぬ時は絞り直しては拭きます。

一八、粘土

醋酸を熱湯に入れ、其液で手拭を絞り拭ひます。

一九、膏藥

テレビン油を付けてよく揉み、次にアルコールを付けて拭きます。

二〇、煤煙

硼砂液を付けて後、アンモニア水で拭き取ります。

二一、靴墨

アルコールで拭き後、アラビヤゴムの溶液を付けて拭きます。

二二、雨

グリスリンを水に溶き、其中で洗ひ、水濯ぎします。

二三、ワニス

アルコールで拭きます。

二四、小蟲の糞や小便

白砂糖を煮詰めた液で洗ひ水で濯ぎます。

二五、スープ

色物の場合は揮發油を付けて、空氣に觸れぬ樣に掌で丸めて揉みます

白地ならば、あんもにやを付けて揉みます。

二六、屠蘇

酒精に、サルチル酸を加へたるものが屠蘇となるのでありますから、筆にアルコールを付け其部に擦すつて、湯氣を流して後醋酸、二三滴を落してこの液中に浸し、水濯ぎを充分にして乾し仕上をします。

縮緬ならば湯伸鏝で仕上げをします。

二七、バター

アルコールを付けて揉み、温湯で洗ひます。

二八、ニス

一、アルコールを付けて

二、石鹸洗ひをします。

ニス塗の家具に出來た白い汚點は布切にアルコールを付けて拭けばとれます。

二九、ヤニ

テレビン油を付けて軟げ、揮發油で洗ひます。

附記　齒に煙草のヤニの付いた時は、松葉を嚙んで後、アルコールで拭く時は綺麗になります。

三〇、黴

白地ならば木綿でも絹でも、蓚酸を水二升に對し、茶匙二杯を熱湯で溶かして用ひます。

黒地ならば醋酸液（水三升に醋酸、四五滴）に浸します。

三一、乳汁

大根の汁又はアンモニア水で落ちますが、色を變ずる憂がありますから注意して使用いたします。

但し乳汁のため紅絹の色が表に付きました時は、藍を鍋で煮出して其煮汁で表布を洗ひますと、奇麗にとれます。

三二、蠟

一、燒灰を新聞紙の上に乘せ、それで蠟の上を壓しておく時は（灰の溫度は新聞紙の焦げる程度）蠟は自然に紙に吸ひ取られます。

二、燒灰の代りに燒鏝又はアイロンを紙の上からかけると、熱のために溶かされて紙に吸ひ取られます。

何れの方法を用ひても後は揮發（又はベンジン）を付けて採んで置きます

三三、錆

一、白地に付いた錆

蓚酸茶匙一杯を熱湯一合に溶かした液に浸して取ります。

二、色物に付いた錆

一、リスリンを筆に付けて

二、水一合に醋酸と酒石酸を茶匙一杯づゝを溶いた液に浸します。

三四、不明の汚點鑑別法

先づ汚點の付いた部に、白色ワセリンを付けて見ますと練を生じる時と青く變色する時とあります。前者は有機酸類で、後者はアルカリ性の物であります。

若し赤くなる時は、鐵銹の類であります。雨水は無色となり、砂糖、小豆、飴等の甘い物の汚點は、泡を生じます。

第九節　衣服保存法

一、アイロンの燒焦しの直し方

絹布或は綿布に拘らず白地は

一、稀鹽酸、二三滴を水一合に割り、其中に苦鹽を茶匙五杯入れます。

（食鹽ならば一つかみ程入れます。）

右の溶液を刷毛又は筆に付けて焦げた部に擦すり日光に乾します。之で輕度の物は目立たぬ様になりますが、更に

二、次亞硫酸を茶匙一杯を熱湯一合に溶かした液を塗り、水濯ぎします

と全く直ります。

墨地又は色物は

一、杓檸酸をつけて日光に乾して

二、醋酸、五六滴を水一合に入れて、この溶液を引いて乾します。

二、アイロンの溫度に就いて

アイロンは溫度の無い時は、無論水を付けても音がありませんが、反對に最高の溫度の時も音を發しません。依つて過失の無い樣溫度を注意しなければなりません。

溫度の次第に高くなるに從つて、發する音を左へ示しますと

1、ジュー　2、ブッシュー　3、ブシッ

4、ペッチ　5、パッチ　6、ピュッ

1、2の場合は絹物　3の場合は、毛織物　4の場合は、木綿物　5の場合は、蒸アイロン（濡布を當てゝ其上から掛ける時）6の溫度は燒焦しが出來ますから、餘り用ひません。

三、日光の燒直し

洋傘、又は着物の色が日光に弱く、燒けるものがありますが、其等は左の方法に依ると直ります。

一、次亞硫酸曹達、一匙を一合の熱湯に溶かし、それを水九合に溶き、燒けた部分を浸します。次に

二、酒石酸茶匙一杯を熱湯一合に溶き、之を水九合に薄め、其中に二十分間位浸し

三、水濯ぎを充分にして日光に乾します。

絹又は、木綿の色物

一、醋酸、五六滴と、タンニン酸茶匙一杯を熱湯一合に溶き、水八合の中に入れ、其れに燒けた部分を十分位浸して乾します。

二、木綿物に限り、重曹茶匙一杯を水二升位に溶き、此の中に浸し更に水濯ぎして日蔭に乾します。

四、日光燒けを防ぐ法

一、色物

日光に燒けることを豫め防ぐ爲の方法であります。

水二升に醋酸、四五滴、クリスリン、三四滴の溶液中に浸して乾します。

二、白地

水二升に、酒石酸、又は蓚酸を茶匙一杯を熱湯二合に溶き、水一升に薄め

其中に浸して、水濯ぎをして乾します。

五、布が擦れて光を生じた時

洋服や着物の脊が椅子にすれてそこが光つて來ると見苦いものですがその時は

一、先づ刷毛で全體の塵を掃ひます。

二、水とアンモニアを等分に混ぜて霧吹きに入れ、光つた部分に吹きかけて、アイロンをかけます。

三、更に全體に此のアンモニア水の霧吹きをして、アイロンを掛けると直ります。

六、雨に濡れた洗濯物の處置

洗濯をする際、洗濯場や乾燥室が無い時は、天候を見定めてから準備に

かゝらないと、折角洗つた物が雨の爲に汚れじみたり、臭氣を生じたり、梅雨の頃は黴が付いたりします、さなくとも取り込む爲に、頭から雨を浴びる樣な事になります。

一、若し洗濯してゐる時に雨が降つて來たら、白い物と色の物とを、別々に水をたつぷり入れた盥の中に浸けて、一日に二、三回水を取替へて置けば、臭氣を發しません。

二、既に臭氣を生じた物は、清水で濯ぎ、尙取なければ熱湯を通します。

三、糊を付けた洗濯物は濡れたまゝで置くと、黴が出來ますから一時糊を落して、水桶に浮して置きます。

（附記）雨に依つてシボの出來たセルの手當

シボの出來たセルは、霧を吹き乍らかけてもきゝませんから、リスリン

と醋酸、五六滴を洗濯水の中に垂らして、衣類をつけ板の上に置き、マルセル石鹸の樣な良質のものを刷毛に付けて洗ひ、濯いで乾します。霧をたつぷり吹き、全體が濕つた時、强いアイロンをかけて仕上げをします。

七、毛織物(洋服、襟卷、メリンス、毛糸等)の害虫に就いて

すべて毛織物には虫が付き易く、特に四月頃から幼虫から蛹となり、五月中に成虫(蛾)となつたものが、子孫の食物に適する食物に產卵すると、それが孵化して幼虫となり來春蛹となるまで、其毛織物を食べて生きて居るのですから、今頃から秋にかけて毛織物に對しては、此幼虫の驅除に努めねばなりません。それには汚れたものは毛織物洗濯法に依り、それ〴〵洗濯をし、汚れの少いのは揮發油を用ひて襟垢を拭ひ取るとか、アンモニアを用ひて手入れをしてから日光にあて、一枚々々新聞に包んで、茶箱と

かトタン張りの箱にをさめ、ナフタリンかチクロール、又はベンゾールを入れ目張りをして置くのであります。行李とかツヅラは虫が這入やすいからいけません。それから土用干をした際も矢張そうして置くのであります。

毛織物を食ふ害虫には普通ラシヤミノ虫が多い、此虫は黑は食はず、重に赤色を好みます。毛皮類は根本のところを食ひメリヤスやセル類は初め小さい穴を澤山に掘り、更にその穴と穴との間を輪狀に溝を作る樣に食ひます。此の虫の成虫である蛾は、日中は隱れて居て產卵し、夜中燈火に寄つて來ますから注意して殺すと良いのですラシヤミノ虫とは反對に日中に隱れてゐます夜間產卵するものに、ツヅリ蛾、モーセン蛾、チビヤルカツヲ虫があります。

ツヅリ蛾は毛皮、獸毛、羽毛、毛糸等に付き易く、ラシヤミノ虫の蛾よ

りは稍大きい方です。

害の加へ方は品物によつて違ひますが毛布類は毛の生へ際を食つて行きラッコの毛皮等は細毛を食ひます。モーセン蛾は毛織物類では太い纖維のものを食ひ、食ふに從つて、蜘蛛の樣に細い糸を出して巣を作り、成長に伴ひ、漸次に廣く巣を作つて行くのであります。チビヤルカッヲ虫は花壇のある、家庭では特に注意しなければなりません。何故なれば此の虫は日中はパラとか菊の花の中に隱れて居るからです。黄と鼠色の縞のある小さい甲を持つてゐる虫で、花のあるところで交尾し家の中へ來て毛織物に產卵します。赤色を一番好みますが、次に黄、青、綠、藍、黑の順序に食ひます。以上の幼蟲は何れも保護色を持つて居て、一寸見ては判りかねますから、仕舞ふ時の手續きには、餘程注意を要します。且つ土用干は成るべ

く秋口にします、その際、熱いアイロンを掛けると一層害虫驅除に效能があります。

八、洋服の手入法

一、塵を掃ふ事

洋服は和服と違つて、組織が荒く出來て居ますから、塵埃を吸收し易く其の塵埃の中には色々の恐るべき微菌が浸入してゐるのでそれが病原の媒介をします。しかも此の目に見えない塵埃は表面に止らず、次第に地質に吸込まれますから、其實洋服は非常に不潔なものであります。尙不潔にして置けば、色は褪せ害蟲を受け易いと思ひます。此の埃を除くと云ふ事は、衛生上又保存上大切な事は申す迄もありません。

クリーニングの工場では、それ〳〵の機械に依つて埃をはたき出し、埃

を吸取る樣になつて居りますが、家庭では其裝置がありませんから、日頃怠らず洋服刷毛で埃を止めぬ樣に心掛けなくてはなりません。室に掛て置く時は、風呂敷大の布を眞中半分位裂目を入れて肩から掛けて置きます。若し當分着ない物は、一度クリニングをして害虫に就いての部で述べた樣な方法に依るか又は一組づゝ厚い糊氣のない西洋紙に包んで、中へナフタリン二つ三つづゝ脱脂綿に包んで、二三ヶ所へ入れて置きます。但しどちらかと云ふに洋服は餘り積み重ねてしまふと、中央が蒸されて虫が湧き易いものですから、衣紋掛へかけたまゝ、洋服簞笥へ吊して置くと、其間に隙が出來て乾いた空氣に觸れる事になりますから、保存上には最も良いのであります。

ズボンは膝頭がふくらんで格好が惡くなり易いものですから、日頃はズ

ボン伸器に挾んで置きまして（洋品店雜貨店にありこの器はズボンの上下を挾んで螺旋で引き伸します。）尙時々アイロン又は火熨斗を掛けます。之は單に皺を伸すばかりでなく、濕氣をとり洋服の耐久力を增し、服地を若返らせます。アイロンを掛ける際には必ず埃を掃つて、濕布を當てゝ其上から掛けます。濕布は垢を吸收する役目もあります。

九、衣服保存上の心掛

一、白木綿、麻の物は蔭干にすると、仕上りが何となくぼんやりする物ですから、强い日光に當て、乾しますと、色も冴え、眞白に仕上り、糊もよく效力が表はれます。

二、色物は日光を避け蔭干にします。

三、洗濯物に火熨斗をかける時

糊の付いた物は一度よく乾してから、全體に少し濕氣を付け堅く卷いて二、三十分間放つて置き、火熨斗布團又は毛布の上で鏝やアイロンを掛けます。

鏝をかける時

四、木綿物は可成熱い鏝をかけないと、汚れが浸みたり、小皺が伸びなかつたりします。

五、色の落ち易いものは

石鹸を使はぬ樣にし、又その織物の種類によつて、色留法を行ひます。

六、木綿縮の襟

水に浸すと縮の襟は縮んで困りますから、洗濯前に襟に鏝を掛けて置きます。

七、毛織物アイロン掛け

ネルやセル、メリンス等の毛織物は襟芯や、縫目などに水氣が殘つてゐない樣に十分乾かすことが肝心であります。アイロンを掛けるには全面に濕りが行渡る樣に霧を吹き濕布の上から、一二度木綿物にかけた後のアイロンを用ひると奇麗に仕上ります。なるべく日向水又は微溫湯の中に浸しておいて、汚れたところには必ず刷毛にマルセル石鹸の溶液をつけて輕くこすつて洗ひます。後は振り出す樣にざぶ〳〵と洗へば奇麗になります。

糊氣があつて奇麗に汚れが落ちないものは、毛物ならばマルセル石鹸を溶した微溫湯に洗濯曹達の溶液か、アンモニアの少量を混ぜて洗ふと大體は落ちます。

新らしさを失はない洗濯の仕方

浴衣地、紺絣、染紺等は一度洗濯すれば、いかにも洗ひ漂したらしくなりますが、一度それ〳〵に色留法を行つてから洗へば新らしく見えます。

十、子供洋服と洗濯

子供洋服が何處の家庭でも用ひられる樣になりましたが、其型や地質、色合ひ等、美的方面には相當考慮されて居ますが、一度汚れた場合には洗濯上色々不都合を來し易いのを殘念に思ひます。

例へば絹の裏に麻を用ひたり、毛に木綿を用ひたり、木綿に絹の刺繍がしてあつたり、絹に人造絹糸の飾が付けてあると云ふ場合が多いので、毛が縮んで木綿がふき出したり、人造絹糸の飾が代無しになつたり、表の洗濯をして裏が落ちなかつたりする樣な事があつて折角美しかつた服も一度の洗濯に依つて見すぼらしいものになります、ですから豫め子供服を仕立

てる時は洗濯に具合のよい樣に布類を取合せる事が必要であります。又困るのは包みボタンに金屬製のものや、木製のものや、貝ボタン、澱粉を固めたものがありますが、之等は洗濯に際して、取除いて置かなければ金屬からは錆を生じ、木製の物からは、木の汁が浸み出し、澱粉を固めたものは熱い湯によつて溶け、貝ボタンは石鹸湯で光澤を失ひます。

それで子供服を仕立てるに際してボタンの撰擇及び、其の取外しを自由になる樣尙洗濯といふ事を第一の考慮に入れて、度々汚れても洗濯に耐へる樣に仕立てられることを希望いたします。

大正十四年十月十六日印刷
大正十四年十月二十日發行
昭和三年十二月十五日再版發行
昭和四年六月二十日五版發行

不許複製

定價金壹圓

著者　大妻コタカ
東京市神田區今川小路二丁目十四番地
印刷者　高倉嘉夫
東京市神田區今川小路二丁目十四番地
印刷所　忠誠堂印刷所
東京市麹町區上六番町七、八番地
發行所　大妻同窓會出版部